

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第2回

天下人と大友宗麟

争いの絶えない戦国時代を生き抜くには、先を見通す見識と卓越した政治力が必要で、時の権力者(天下人)と良好な関係を結ぶことも重要な戦略の一つでした。

大友宗麟も、積極的に中央の室町将軍家とのつながりを深めていきました。それは、義鎮(後の宗麟)の「義」の字を時の将軍足利義晴から元服の際に一字をもらったことから、うかがい知ることができます。

また、宗麟と織田信長、両者の接触は意外と早く、信長が歴史の表舞台でスポットライトを浴びる以前から始まっていたようです。1567(永祿10)年、信長が33歳の時、「赤壁賦凶盆」という名盆をすでに贈っており、早くから信長の実力を見抜いていた宗麟の先見性を垣間見ることができます。

1585(天正13)年に関白となった天下人豊臣秀吉は、大友氏と島津氏の戦い(豊薩戦争)に対し、すぐに争いをやめるように両者に停戦を命じます。宗麟は翌1586(天正14)年4月にこれを受諾することを表明するために大坂(現大阪市)にのぼり、新築されたばかりの大坂城で秀吉と謁見します。秀吉は宗麟に対し、その訪問を喜び、自ら城内を案内したといわれています。

このように宗麟は、将軍家や信長、秀吉などの有力武将と緊密な連携をとるなど、中央の動きを探るための情報ネットワークを構築し、地域国家(豊後を含めた北部九州6か国)の建設に尽力しました。こうした点にも、卓越した宗麟の政治力をうかがうことができます。



赤壁賦凶盆

(名古屋・政秀寺蔵/写真提供:根津美術館)
信長が天下人になる以前に宗麟が贈った漆製のお盆。